

【純口話主義の名古屋聾学校橋村徳一先生の素顔】

2001年10月20日(土) 日本聾史学会松本大会

愛知県一宮市 桜井強

愛知県岡崎市 岩月由展

【橋村徳一とは】

明治12年3月18日愛知県中島郡長岡村(現・祖父江町)大字四貫に生まれました。
明治35年3月愛知県第一師範学校卒業。同県海東郡(現・海部郡)津島高等小学校訓導、同県中島郡西部高等小学校訓導に歴任。明治40年1月中島郡祖父江尋常小学校校長に就任。大志を抱かれ明治41年4月上京。東京盲啞学校教員練習科に入学。明治42年3月同校を卒業し直に日本大学高等師範部に入学。明治42年6月東京市富士見尋常小学校訓導拝命。大正元年10月名古屋市立盲啞学校の創立される機、首席訓導に命じる。大正3年8月名古屋市立盲啞学校校長に兼任。大正3年ごろ吃音矯正に堪能する吉澤武雄氏の訓導として来任。氏と共に聾啞生に発音教授を試した。吃音矯正法を応用して教授を開始し共に研究の歩を進めた。吉澤氏の退職され、後任として伊藤洵一氏の来任をし、音声的発音指導法を研究した。聾啞会話読本・聾啞国語読本・聾啞国語教授法を編集。
大正8年8月聾啞国語読本改定聾児会話教授法の編集。
大正13年6月公立盲啞学校校長兼公立盲啞教諭、公立聾啞学校校長兼公立聾啞学校教諭に任ぜられた高等官7等を以って待遇。同日名古屋市立盲啞学校校長兼名古屋市立盲啞学校教諭に命じる。同年10月従7位に叙位。大正14年7月聾教育口話法概論を著本。昭和5年1月その改訂版を再発行される。文部省主催聾啞学校教員講習会の本校に開催の際、西川吉之助氏の動機によって日本聾口話普及会が設立。昭和6年1月より同会主催聾口話教員養成講習会を本校で開催された。(以降毎年開催)
口話法の普及と共に入学者激増し教室不足の為、昭和2年より校舎の増築運動をし、寄付金を集め、校舎8教室の増築された。昭和6年3月、フランスに於ける国際聾啞大会に参列し、欧米視察の途に上がり昭和6年8月無事帰朝。県立移管盲啞分離期成同盟会を組織設立し、職員父兄と共に奔走した結果、昭和7年4月より県に移管された。愛知県聾学校の新設。公立聾啞学校校長兼公立聾啞学校教諭に任ぜられた高等官4等を以って待遇。
昭和7年12月叙動6等授瑞授賞。昭和8年11月愛知県聾学校の新校舎落成挙行。
昭和12年10月愛知県聾学校創立25周年記念日にあたり、橋村先生記念像除幕式。
昭和17年4月30日を以って退任。(定年退職)在職30年奉職。
昭和18年3月21日、太平洋戦争の為、銅の供出という式で、銅像の壮行訣別式。
昭和43年12月17日、享年90歳。

【純口話法のきっかけ】

「聾啞教育はどうしても、口話法でなくてはならない」と感じたのは大正3年のこと。こんなことがありました。私の学校の卒業生にとっても絵が上手な生徒がいたのです。卒業式がすんで、この生徒の親が私のところへきました。「私の息子が、会社へ入って製図の仕事をしたい、と言うので、先生、どうかその会社に就職を依頼して下さいませんか」と頼まれました。それはもったもな事、そしてとてもよいことだと、早速、担任の先生と聾啞の生徒、その父親と私で、会社の社長に面会に行きました。そして、この生徒の在学中の図面や国語などの成績を見せ、また家柄や本人の性質など詳しく説明して、ぜひ雇っていただきたいとお願いしました。

社長「うちの会社は口のきけないものに頼まなくても、口のきけるものがいくらでもいる」

校長「この子はものを言えないかもしれないが、筆談で用事ができるから、何とか使ってやって下さい」

社長「忙しい世の中、言葉で指図するのさえ面倒だと思っているのに、筆談などというやっかいなことができるものか…。」

校長「それはごもっともですが、この子が会社に雇って頂けたら、この子だけでなく、ご両親もどれほど喜ぶかわかりません。また子どもの学校としても名誉なことです。何とかがまんして雇って頂けないでしょうか」

校長先生の頭を低くしてお願いしたのですが、社長はとて聞き入れてくれませんでした。

社長「あなたの会社にとっては名誉かも知れないだろうが、こちらにとっては不名誉なこと、オシを雇ったために会社の体面が汚される」

校長「しばらく給料はいらぬから雇って見てくれませんか」

社長「そんなにまで頼むなら、雇ってみよう。その代わり一日おきに教師が来て注意してくれなくては困る」というような条件付きでようやく雇ってもらえた。橋村先生はこの経験から聾啞教育は手真似では駄目だと強く感じ、それから手話はやめて口話教育の研究に熱中して、指導もするようになったのです。

(川渕依子著『指骨』・上野益雄著『聾教育問題史』)

【口話法の裏づけ】

社会から隔絶された手真似学習の聾啞を救い出したいと考え、日本語で生活し日本語で物事を考え読み書きが出来、その上、職業を身につけさせて自立自営のできる様にしたいと念願され、大正2年名古屋市立盲聾学校に奉職以来約10年職員一丸となり試行錯誤しながら研究を進め、口話法教育の自信を得て、大正9年度入学の聾児から純口話法教育を実施された。

【聾教育ラジオ放送】

大正15年2月12日。午後6時30分から7時まで。名古屋放送局より

橋村校長は、「聾啞の教育」と題して、聾教育の一般から口話法の概要を説かれた。

聾部初等部4学年加藤儀一さんを招いて、会話の出演をされたとの記録があった。

加藤少年の述懐談があって7時終了し、放送が終わりを告げた折、昔から物言わず者と誤信された聾児の巧みな話声がラジオを通じて4万の聴衆の耳に達した時、驚きと感激など電話で、感謝感激のたくさん寄せられた。

翌日から県下のみならず東海地区の遠隔の地から電報・手紙・葉書を寄せられた。自ら聾教員に志願する教師もあり、校門を叩いて激賞し親しく本校の様子を視察された。

朝鮮仁川の磯部氏が感激の余り、名古屋新聞を介して金一封を贈られた逸話。

昭和6年10月18日。午後7時から。名古屋中央放送局より。

聾教育振興会長候爵徳川義親閣下「聾教育において」と題して聾教育に精力することになった動機から口話教育の振興を図って聾者に光明を興される大抱負を講演された。講演中の「…文部省あたりでは私を指すのに尾張の徳川さんとも言わず。ツンボの徳川さんと呼ぶ様になった」とか「…口話法の普及と聾教育の振興によって事実上、啞として暗い生活をする哀れな人が日本中に1人もなくなるまでこの運動を続けたい」など語った。済まないやら有難いやらで終始感激泣して拝聴した。講演に続いて名古屋聾学校初等部本科2年生の飯田雅一さん・本田多鶴子さん・3年生の小澤日出子さん・5年生の豊田マスさんの4名が、光明に恵まれて声も明らかに会話をし「日の丸」「蝶々」の歌唱した。聾生の歌唱放送はこれが最初のことでした。

【橋村徳一先生の退職後の動き】

太平洋戦争の際、召集と徴用で働き手がなくガランとしたある工場を見て、聾啞者の採用を思いついたのが「八光会」誕生のきっかけでした。昭和19年。

八光会という名前は、橋村徳一が、聾啞者は生活権とか、義務教育権とか、8つの権利を奪われていると言ったので、「それに光を」というつもりで名づけた。彼等は非常に喜んで仕事をし、健常者が一日に百つくるものを百二十もつくるほどの働きぶりであった。終戦後、聾啞者と共に名古屋郊外の緑区鳴海に木工授産所をつくり、八光会を財団法人組織にした。翌年には戦後初めての「共同募金」から、当時の金額で80万円もの大金を授与された。このお陰で、木工所は規模が大きくなり、設備を整えるようになった。共同募金の総裁である高松宮殿下が自ら八光会を訪ね激励されたこともあった。こうして「身体障害者愛護事業に尽瘁」したとして、ヘレン・ケラーから表彰されることにつながった。

表彰式の翌日、女史は八光会鳴海授産所を訪問。当時「毎日新聞」愛知県版に、戦時中から「幸いのうすい聾啞者の教養と独立性養成に血のにじむような努力を続けていた」と記事があった。その関わりがあったのは、日本信販(株)名誉会長 山田光成氏・候爵徳川義親閣下・佐治タイル社長で中心に事業を興した。